

<編集後記拡大版>

『資本と地域』創刊 10 周年を迎えるにあたり
歴代の編集委員に思い出を語ってもらいました。

『資本と地域』創刊 10 周年に寄せて

宇都宮 千穂

第 10 号の刊行を心よりお祝い申し上げます。また、10 号に至るまで執筆にご協力いただいた皆様、企画・編集に携わってくださった院生の方々、ありがとうございます。『資本と地域』立ち上げの張本人として、お礼申し上げます。

『資本と地域』には、「論文」や「研究ノート」、「書評」といった定番の文章だけではなく、様々なコラムや記事が掲載されています。これは、世の中にすでにある学術雑誌のような形ではなく、自由で明るい議論の場をめざした雑誌だからです。私が院生の時期は、大学院生がとても多く、就職も論文の掲載もなかなか上手くいきませんでした。大学院生や若い研究者がつくる未熟で不器用で学問分野もはっきりしないような、しかし真摯で新しい議論を真っ正面からとりあってくれる場が、この世のどこかに欲しかったのです。

だから、雑誌を作る過程では、かなり過激な案が飛び出しました。「院生の責任編集」は穏やかなほうで、「レフェリーは公開」「教員は掲載しない」等々……。院生に理解のあった岡田先生でも、「いくらなんでも」と何度もストップをかける場面が

あったのを覚えています。

企画を進めるなかで次第に仲間も増え、ようやく第 1 号の出版が叶いました。そこから第 10 号にいたるまで、院生の方々が引き継いでくださったことに心より感謝しております。院生の時期は、自分の研究を軌道に乗せる大切な時だと、今さらながら思います。そんな時期に雑誌の編集をこなすことは大変なことですし、「余計なものを作ってしまったかもしれない」と、申し訳なく感じています。

大学で職を得てから、地域の現場で調査をたどるしくも続けていると、気づくことがあります。それは、新しいものを見ているのは学生であり必ずしも職業研究者ではないこと、地域で始まっている新しいことに最初は誰も見向きもしないということです。宮本憲一氏が、かつて地域経済学会の講演で「新しい理論は少数派から生まれる」と述べられたように、また、岡田知弘氏が小さくても輝く地域を歩き回っているように、研究の現場でも、小さな何かを見過ごさないことが大切だと感じています。

私は、今でも『資本と地域』という学術雑誌は、新しい何かが生まれるかもしれない貴重な場なのではないかと思っています。

(愛媛大学法文学部)

『資本と地域』の 10 周年に寄せて

大貝 健二

まずは、『資本と地域』が刊行 10 周年を迎えたことに敬意を表したいと思う。私がこの『資本と地域』に対して、一体どのような貢献をしていたのか、当の本人はあまり見当がつかない。しかし、10 年間続いてきたうちのわずかな一時期でも、誰かから私自身が役に立ったと思って頂けているのであれば、それは有り難いことなのかもしれない。とはいえ、そんなことよりも、『資本と地域』という刊行物が、地域経済研究会を母体に、歴代編集委員の努力と、多くの方々の愛情に支えられていることに感謝したい。

『資本と地域』という雑誌を、大学院生で編集しながらも、ISBN 登録もして、学術雑誌として「認知された」形で発刊していきたいと初代編集委員長の宇都宮さんから話を持ちかけられたのは 2004 年の頃だったか、、、。この辺りの記憶が全くないのであるが、当時、研究業績を出せる場がほとんど限られている状況に対して、どうにかしたいという編集委員長の気持ちが強かったことだけはよく覚えている。研究業績（中でも査読付き）がない→公募に応募しても弾かれる→就職が決まらないという悪循環を断ち切りたいという思いだったのではないと思う。一方、大学院に入りたてで、駆け出し身分の私は、先輩方がどこまで切羽詰まっていたのかが分か

らず、ただ「面白そうだな」と、自分達で何か創り出すことの方に興味が向いていたように記憶している。そして、実務作業に携わることになり、素人ながらに編集作業の大変さ、楽しさを学ばせて頂いたのかと思う。

もちろん、駆け出しの院生身分とはいえ、ある程度の時間を編集作業等に割かなければならないことに対して、全くストレスがなかったと言えは嘘になる。ただ、何だかんだと思いながらも、院生当時に作業を続けることが出来たのは、『資本と地域』の目標・目的が明確だったことと、当時の編集委員仲間がいろいろと相談しやすかったことに加え、それぞれの役割分担がある程度はしっかりと出来ていたこと、これらの理由に尽きるだろう。

話は変わるが、自分自身が大学院生だった頃に、当たり前なことではあるが、当時の自分には、衝撃的だった言葉をかけられたことがある。それは、次のようなものである。「(大学院時代の)仕事で先生や先輩から降ってくる仕事で『やって損した』というものは1つも無い。むしろ、仕事が降ってくるだけ有り難いと思え」。「仕事を振る側も、たくさんいる院生の中でそれぞれの人物評価をしていて、誰にお願いをすれば厭わずに、かつ対外的な信用を損なわずにやってくれるかは常に見ている」のであり、「その仕事が降ってくるポジションに自分がいればいいじゃないか」、「論文は、書いて当たり前のものだから、論文を言い訳にしてそういう仕事が出来ないというのは甘えだと思え。仕事をしている中でヒントが見つかることはたくさんある。みんなが寝て

いる間に、論文は書けばいいじゃないか。」というようなニュアンスのことであるが、実際、ここまでハングリーにやっている院生がいるのかと驚いたのだが、彼の考え方を聞いて、自分自身の考えの甘さに気づかされたのも確かである。だからこそ、大学院生を続けて、今の自分がいるのかもしれない。

さてさて、当の私は札幌に移住して6年目になる。札幌に来てしまったので、なかなか研究会に参加することもできず、地域経済研究会に対しては浦島太郎状態である。そんな私に対して、年に1回、あるいは隔年で郵送されてくるこの『資本と地域』は、地域経済研究会が、あるいは岡田ゼミが今どうなっているのかを少しばかり教えてくれるものになっている。掲載されている論文を見ながら、今はどういう編集体制でやっているのだろうか、とか、時々思いを馳せている。と同時に、そろそろ研究成果を京都に持って行って、研究会で報告しなければ、という気持ちにもなっている。教員になってしまうと、意識を持っていないと、研究会のようなお互いの研究に対してコメントを言い合うような時間や場がほとんど無くなってしまう。なので、地域経済研究の中で自分の立ち位置を確かめる意味、今後の研究の方向性を見定める上でも、地域経済研究会にも時々参加して、また寄稿などを通じて、『資本と地域』のさらなる発展に足手まといにならないように貢献したいものである。

(北海学園大学経済学部)

「大学院生からのチャレンジとその成果」

池島 祥文

私が『資本と地域』の編集委員として活動していた時期は、主に2005～2009年であり、修士課程在籍時から編集業務に携わっていました。活動当初は原稿の収集や編集・校正作業、さらには、会費管理作業を中心としており、一年に1回の発行とはいえ、編集業務や会計業務に手間取っていました。特に、刷り上がった本誌を関係各所や諸図書館に発送するための書面づくりや発送作業には、他のメンバーとともにドタバタしながら行っていた記憶があります。

『資本と地域』の誌面については、大学院生や先輩研究者の「生態」が垣間見える「今をとらえる」や「学会参加記」、さらには「研究の周辺」の各コーナーがおすすめでした。つまり、収録されている論文よりも、それ以外のコーナーのほうが興味深いという感想をもっていました。そのため、博士後期課程になると、大学院生活にも、編集委員業務にも慣れてきたということもあり、「せっかく紀要を作るのなら、論文を集めるだけではなくて、隔月の研究会と連動させて、何か新しいことをやってみたい!」という思いが募ってきました。

「何か新しいこと」として浮かんだプランは院生でシンポジウムを企画して、そこで普段の研究会な

どではできないような議論、つまり、「各自の専門分野が違って、共通の土台となるような理論的検討や分析視角の検討をしてみたい」というものでした。また、このシンポジウムをただ開催するだけでなく、その成果を踏まえて文章化し、『資本と地域』に特集企画として掲載しようと考えました。定例の地域経済研究会でも、個別の研究報告が並ぶことが多く、そうした個別の研究を超えたところで、参加者みんなで議論するような場にはなっていなかったもので、研究会そのものを少しでも自分にとっては刺激的な内容にしたいと考え、このシンポジウム案を提案してみました。

2007年度（第4号）には、地域経済研究にもよく登場し、普段の議論でも何気なく使用している「空間性」概念について着目しながら、「地域経済学とは何か」を考える企画を立ち上げました。理論的枠組みや分析視角といった研究のベースとなる部分をしっかりとみんなで議論し、個別の研究対象は違っていても、地域経済研究を進めるうえでの共通の「基盤」を作り出せないか・・・という思いがあったわけです。もちろん、シンポジウムの成果としては、期待通りに「共通の基盤」を見出したとはいえませんが、準備する過程も「空間とは何か?」「空間という概念を使わなければ見えてこない現象や分析って何だろう?」など、登壇者同士での議論はお互いの理解の齟齬もありつつも、「地域経済学とは何か」を念頭に、充実した内容を伴っていました。司会を担当してくれた岡田先生や学外から参加して下さった富樫幸一先生および徳永昌弘先生からは、厳しくも、院生のこうした取り組みを評価してくれるコメントをいただきました。特に徳永先生からは「空間や地域を議論するならば、研究サーベイ等を通じて、報告者全員の共通の理解をもったうえで、また、報告者間の見取り図のようなものがないと、シンポジウム参加者を交えた形でしっかりとした内容の議論を組み立てにくい」との具体的な改善点もいただきました。その後、報告内容を原稿化する過程で思ったよりも時間がかかり、『資本と地域』の発行は遅れてしまいましたが、当初の目的通り、研究会および紀要に新しい風を吹き込めたように思います。

その一方で、院生の時点でこうしたシンポジウムを企画運営することによって、研究における理論的成果やその実証分析とのつながりを学ぶといった個人の研究への効果もありますが、むしろ、共同研究

の方法やその際に発生する摩擦、さらには、個別研究をベースとしつつも、ある一定の集団における共通枠組みを構築していくための手順など、複数人以上での研究への効果が非常に得られたと思います。苦労は多かったですが、いい経験となりました。

2008年度（第5号）も同様にシンポジウムを企画し、その成果を誌面に盛り込む方針で臨みました。前回の教訓を踏まえ、シンポジウムの準備段階において、研究サーベイを通じて、報告者全員の共通理解を図り、それらをシンポジウムの骨子として位置づけるように試みました。テーマとしては「市場システム」を取り上げ、地域経済の「範囲」をどのように設定しながら研究を深めていけばいいのかという問題意識を設定してみました。また、地域経済研究における一つのキー概念として「地域経済の階層性」がありますが、これをどのように具体化しながら、研究に活用していくのか、そのような視点をもって取り組みました。日ごろ自分たちが雑談レベルで議論していた「地域経済学とは何か?」「どのような方法論がありえるのか?」「実証研究は多いけれども理論ってないのだろうか?」という率直な疑問を議論していくためのたたき台として、シンポジウムを位置づけていました。物議をかもした(?) 討論内容については、是非第5号をご覧ください。

もちろん、シンポジウムを開催することで研究上の新しい領域が開拓されたり、新しい視点が見出されたりしたとはいえないかもしれません。ただし、自分たちの理解が足りない部分もある中で、研究において、各自が感じている物足りなさというか、取り組まざるを得ないと感じている部分を、徳永先生のサポートを得ながら、単なる意見の応酬にとどまらず建設的な議論の場へと昇華させてもらい、自分達の進むべき方向性を各自がそれなりに確認しあえたと感じています。

地域経済学において京都学派のようなスクールはありませんが、それでも、同じ研究室に在籍し、類似した問題関心や研究領域を有している中で、個別研究に埋没しては、せつかくの環境がもったいないと感じていました。もちろん、研究はあくまでも個人の責任ですが、大学院時代はすぐ近くに仲間がいるという点で、非常に恵まれた環境です。自分の思いをぶつけ、それをもとに議論をして、ひらめきや反省を得る・・・こうしたプロセスは大学院時代の特権だと、大学院を離れてからは実感するとこ

ろです。一人の力では、おそらく学問の発展への貢献は微々たるものかもしれませんが、複数人で協力しあえば、その場では実感できなくても、後々にその成果が芽を出してきてくれます。そうした「研究の可能性」を私は『資本と地域』の編集委員として活動しながら、うまくシンポジウム開催や紀要への成果の掲載を通じて見出してきたように思います。もちろん、意見の相違や反発も研究室内でも編集委員内でも多く経験しましたが、そういう機会を通じて自問自答することも成長の糧となっていたように思います。

また、こうした取り組みには大学院生の自発性のもとより、先輩研究者の支援も必要です。私たちの「悩み」や生意気な「思い」を研究室の先輩という

立場から、徳永先生にはよく汲みとっていただき、岡田先生を巻き込みながら、地域経済学における挑戦を積極的にサポートしてもらいました。私自身、京都大学を離れてからは、地域経済研究会に出席することはできていませんが、こうした先輩研究者と現役大学院生とが共同で切磋琢磨できる環境はこれまた非常に恵まれていると思います。とはいえ、その環境は活用しなければ意味がありません。活用の機会を与えてくれた『資本と地域』には感謝するばかりです。

(横浜国立大学大学院国際社会科学研究院)

『資本と地域』発刊10年に寄せて

関根 佳恵

『資本と地域』の構想が生まれたのは、2003年だったと思う。当時、私は岡田ゼミの修士課程1年生で、研究の世界に飛び込んだばかりであった。ゼミの先輩の宇都宮さんから「雑誌を作りたい」という話を初めて聞いたとき、私の第一印象は「面白そう!」だった。その頃の私はまだ、大学院生を取り巻く研究環境や就職状況の厳しさに対する実感が薄く、ゼミの仲間と共同で新しい雑誌を創刊するという計画に心躍る思いがした。翌2004年に創刊した雑誌は、今年で早10年目を迎えた。大学院生がひとつの雑誌を作り、発刊し続けるということは予想以上に難しく、平坦な道のりではなかったが、雑誌編集を通じて学んだ技術や事務能力は、研究者になった今も大いに活かしている。

しかし、『資本と地域』という雑誌の意義は、それだけにとどまらない。創刊当時、日本は小泉構造改革の最中にあり、世の中には新自由主義的な競争主義や「自己責任」の考えが浸透していた。大学院生も競うように業績を追い求め、自己責任論の下で他者への関心や協働は二の次になりがちであった。雑誌作りに対しても、当初は「仕事が増える」「研究時間が減る」といった消極的な意見が少なくなかった。しかし、今振り返ってみると、雑誌作りを継続する中で次第に編集作業に関わる院生が増え、雑誌作りが研究室の「協働の場」のひとつになった

ことが分かる。

私は『資本と地域』の創刊号から3号の編集に携わった後、3年間の在外研究でフランスに留学した。その間、編集からは遠のいていたが、シンポジウムの開催等、新たな取り組みがおさめられた雑誌が届くのを、彼の地で楽しみにしていた。そのフランスでは、大学院生の教育過程に触れる機会があり、システム化された研究者養成の取り組みに感心した。大学院生時代、人間関係を含めてどのような悩みに直面する可能性があるのか、その対処法も含めて、フォーマルな研修会で話し合っているのである。日本ではおおよそ、研究会の後の懇親会の席で指導教授や先輩から聞いたり、研究室の日々の生活の中で伝授されたりするような内容である。このように日本の研究者養成がインフォーマルな「場」に依存していることから、私は日本の制度を「徒弟奉公制」や「職人型」と呼ぶことがある。今振り返ると、雑誌作りは私にとって正にインフォーマルな研究者養成の「場」だったように思う。また、この「場」は、個々人のエンパワメントだけではなく、研究グループとしてのアイデンティティの形成や個々人の間のネットワーク作りにも大いに寄与したと思っている。

2010年に帰国してから、私は再び雑誌編集に携わる機会を頂いた。この頃、雑誌の編集や研究会の運営の負担が一部の院生に偏っており、雑誌を継続的に発刊することへの「疲れ」も出ていたように思う。そのため、新しいメンバーを迎えて雑誌編集や研究会運営の分担を見直し、協働の裾野を広げるこ

とで第6・7合併号の発刊につなげることができた。
私は翌2011年に就職のため編集作業を離れたが、
今も研究室の仲間たちが雑誌作りという「場」で模
索を続けていることを、頼もしく思いながら応援し
ている。

最後に、『資本と地域』の編集に携わった大学院
生の視点から綴ってきたが、この雑誌が地域経済
研究会の参加者や雑誌の幅広い読者にとって、ひい
ては地域の発展を目指して活動している方々にとっ
て、有益な視点や情報を発信する雑誌として、今後
も歩んでいくことを願っている。

(愛知学院大学経済学部)